108　骨シンチグラフィーによる血管柄付骨移植の経時的検討

村井恒雄[1]，室田景久[1]，富田泰次[1]，大久保康一[1]，
大森薫雄[2]，（東京慈恵会医科大学整形外科[1]，神奈川県立厚木病院整形外科[2]）

広範にわたる四肢長管骨の骨欠損に対する遊離血管柄付骨移植は，現在広く利用されている有効な治療法である。今回，血管柄付骨移植症例に対して骨シンチグラフィーを施行，その診断的意義について検討した。

症例の内訳は，腓骨移植21例，腸骨移植６例，腓骨腸骨同時移植１例であり，術前，術後１週，１か月，３か月，６か月，１年毎に骨シンチグラフィーを行ない，その集積の経時的変化を定量的に観察した。骨シンチグラフィーは，^{99m}Tc-MDPを15mCi静注後，約３時間で行なった。

ＲＩ集積は，術直後より移植骨全体に認められるが，移植骨への集積は，腓骨移植と腸骨移植とでは異なる経過をとった。すなわち，腸骨移植では術直後より高度な集積が認められ，経時的に減弱する傾向がみられた。一方，腓骨移植では健常側と同程度の集積が持続した。また，移植腓骨の骨接合部での集積は，骨折の場合と異なる経過をとった。骨シンチグラフィーは，移植骨の生物学的活性，移植床との骨癒合についての機能的な情報を得るために有用であると考える。

109　骨シンチグラム用99mＴｃーＭＤＰキットＭｅｄｏｒｏｎａｔｅⅡ（Ｎ１６５）アマシャム使用経験

田ヶ谷二三夫　（都立墨東放射線科）

アマシャム社骨シンチグラム用99mＴｃーＭＤＰキットＭｅｄｏｒｏｎａｔｅⅡを試用する機会を得たのでその結果を報告する．

Ｍｅｄｏｒｏｎａｔｅ Ⅱは，同社99mＴｃーＭＤＰキット（Ｎ１１５）と同効品であるが，標識率を向上させ，99mＴｃ最大５００ｍＣｉ／バイアルの安定標識を保証している．　’８６年６／１ー’８７年４／３０までに当科で施行した骨シンチは約２５０例で，この中他社キットで施行したもの，およびアナログカメラで取ったものを除く，１３０例のシンチについて検討した．

調製法は生食にて溶解したＭｅｄｏｒｏｎａｔｅを，一人２０ｍＣｉ宛用意した99mＴｃ溶液と混和，静注３ー４時間後デジタルカメラにて全身シンチをとり，肋骨椎体等が明瞭に分離読影できる例をｅｘｃｅｌｌｅｎｔ，前後を参考にしてなんとか全部判定できる例をｇｏｏｄ，個々の判別困難な例をｐｏｏｒとした．

結果は１３０例中，

ｅｘｃｅｌｌｅｎｔ　９０（６９．２％），
ｇｏｏｄ　３５（２６．９％），
ｐｏｏｒ　５（３．８％）のごとく７０％近くｅｘｃｅｌｌｅｎｔ　ｉｍａｇｅが得られた．

110　肺小細胞癌治療前後の骨シンチグラフィの変化

北野保、宮川トシ、高田　実、中筋　孝史、
福永義純　石田　智恵子、豊田　敬子、
（大阪府立羽野病院RI科）

肺小細胞癌の治療前後に骨シンチグラフィを撮影しその治療効果判定の意義について検討した。対象は治療前後に骨シンチグラフィを含むstagingが行われた肺小細胞癌症例63例（Limited disease 23例，Extensive disease 40例）で、方法は^{99m}Tc-HMDP 20mCi静注後3.5～4時間後に、ワンパスコリメーター装着のシーメンス社製シンチ　カメラLFOVにて、正面と背面の全身像を撮影した。治療前の骨シンチグラフィ陽性率は13例（20.6%）であった。治療前後の比較では、陰性→陰性47例（74.6%）、陰性→陽性３例（4.8%）、陽性→陰性１例（1.6%）、陽性→陽性（減少）2例（3.2%）、陽性→陽性（不変）4例（6.3%）、陽性→陽性（増悪）6例（9.5%）であった。肺の原発部位が奏効しているにもかかわらず骨シンチグラフィ不変の症例が９例あり、単発で肋骨前部、胸、腰椎陽性例で、いずれも偽陽性と考えられる症例であった。

111　癌の骨転移と骨痛

中野俊一[1]，長谷川義尚[1]，井深啓次郎[1]，橋詰輝巳[1]，
野口敦司[1]，小山博記[2]，小松原良雄[3]，（大阪府立成人病センター，アイソトープ診療科[1]，同外科[2]，同整形外科[3]）

癌の骨転移における骨スキャンの異常集積と骨痛との関係についてはいくつかの報告があるが、必ずしも一致した成績は得られていない。乳癌においても、骨転移に症状を伴う率は非常に高いとする報告や骨転移例の約⅓において骨痛を伴わないという報告がある。

我々は昭和６０年１月から２年間に、当センターにおいて乳癌で骨スキャンを施行した４００例で、注射前に骨痛の有無について問診を行い、異常集積との関係を調べた。骨スキャンはＴｃ－９９ｍ ＭＤＰ ２０ｍＣｉ 静注、３－４時間後にガンマカメラでスキャンした。骨スキャンで異常集積をみとめたのは１１４例であるが、多発性集積、Ｘ線、フォローなどにより骨転移と診断されたのは３８例で、このうち骨痛を訴えなかったのは９例（２４％）で、術前１例、術後フォロー中のもの８例であった。多発性集積を示し、骨痛のある例でも、腰背痛のみを訴える例が多くみられた。

Presented by Medical*Online